

カップケーキの寓話：
ロンドン暴動にみる情動・国家の身体・ホモナショナリズムの接続
飯田麻結

1 はじめに

本論文は、2011年に起きたロンドン暴動を具体例として扱い、近年様々な学術領域で着目されている情動理論、また国家の身体やホモナショナリズムの構築との関係性から考察する。同暴動は、その喚起した二つの全く異なる反応において分析に値する。すなわち、人種や階級、貧困にまつわる差別の構造を暴動の要因として挙げ、それらの改善が社会的変革を導くとする議論が生じた一方で、暴徒やその支持者を「他者」として除外することで、国家が理想とすべき保守的な価値観を強化するような言説が広く取り上げられたのである。本稿は、これらの視点を「ケーキ」と「カップケーキ」という比喻を用いて論じた、エセックス大学の哲学講師であるトム・ワイマンによるガーディアン紙への寄稿記事を主に参照した上で、その二極性が示唆するものに焦点を当てる。暴動に対する対照的なレスポンスから生じた主要な論点としては、暴徒が「感情的な他者」として提示される際のロジックやネオリベラルな消費社会との接続、そして「危機」に直面した国家がその統合性を維持するために利用する、美化された想像上の過去への憧憬が挙げられる。そこで本論文は、近年フェミニズムやクィア理論の視点から語られてきた身体の境界や歴史性に関する議論を、具体的な事象を伴って前景化させた一例として、ロンドン暴動をめぐる諸々の問題を分析する。

その波及が広範囲に渡ったことから、イングランド暴動（2011 England riots）とも呼ばれる一連の出来事は、同年8月4日、ロンドン北部で銃器所持の疑いをかけられたマーク・ダガンという黒人男性が警察官によって射殺されたことに起因する。その2日後、射殺された男性の家族や知人たちによって警察官の行動を不当とした抗議運動が行われるが、当初は穏健なものであったそれは、略奪や放火、破壊行為を含む暴動へと発展し、イングランド各地へ飛び火することとなった。最終的に5人の死者と3,000人以上の逮捕者を出した6日間に及ぶ暴動は、参加者の多くが貧困層に属する若者であっただけでなく、

ブラック・コミュニティや人種的マイノリティへの偏見を浮き彫りにした。英ガーディアン紙とロンドン大学スクール・オブ・エコノミクスによる共同研究によれば、暴動の第一段階の特徴は市民の「怒り (anger)」の発露であった (The Guardian and LSE, 2012, p. 4)。彼らの怒りの矛先は、警察による不当で差別的な取り締まりや、若者の貧困に代表される社会的・経済的な不平等など多岐に渡る。暴動に参加し逮捕された270人に行われたインタビューの中でも、着目すべきは彼らの51%が「自分はイギリス社会の一部だと感じる」と回答したのに対し、ガーディアン紙と世論調査会社ICMが行った大規模な調査では国民のおよそ92%が「そのように感じる」と答えた点である (The Guardian and LSE, 2012, p. 25)。この割合は、24歳以下の逮捕者に限れば80%を超える。また、適切な社会保障を受けられない、職に就くことができない、といった理由で自らを「社会的に不可視な存在」と感じるという意見は特に暴動に関わった若年層に顕著であった。さらに、「何が暴動の重要な要因となったと考えるか」という問いに対して、逮捕者とその他の人々の回答には大きな隔たりがあった。特に「犯罪性」「モラルの低下」「家庭環境の問題」「ギャング」という四つの項目に関しては、それらが「重要な要因である」と答えた市民の割合は逮捕者のそれを20～30%も上回る。その一方で、逮捕者は「貧困」「警察の監視体制」「政策」「マーク・ダガンの死」を主な要因として挙げている。以上の統計からは、この暴動が包含する社会的課題が、個々の要因のみならず国家やコミュニティへの帰属意識における差異へと反映されていると言えるだろう。

また、ロンドン暴動が起きた当時のイギリスの社会的背景は、2007年から大衆紙ザ・サンが使用しているBroken Britainという語に代表される。同語は主に児童虐待、十代の妊娠、若者の失業率などを問題化する文脈で用いられ、これらの課題は国家の統合性 (integrity) を脅かす危機として語られた。さらに、伝統的な家族の形態や反移民といった保守的な価値観と親和性の高いこの語は、2010年に保守党の党首であったデーヴィッド・キャメロンの選挙演説にも引用されている。暴動に対する政府の指針を問われたキャメロン首相は、“Broken Britain”と明らかに対応する「壊れた社会 (broken society)」の分析が最重要の政治的課題であると宣言し、阻害されたと感じる若者の怒りを鎮め

る手段の一つとして「チームワーク、規律、義務、礼節といった古臭く聞こえるかもしれない語」の重要性を説き、「個々人の責任を無効化するような人権に関する捻じ曲がった認知」を政府は見直す必要があると述べた (Stratton, 2011)。2013年に政府が発行した暴動に関する最終報告書には、若者の失業率や教育・福祉へのアクセスの改善が不可欠であるとしながら「暴徒の大半は我欲によって突き動かされ [...] 貧困や人種、経済的状況は2011年8月に私たちの街に起きた事象の弁解としては受け入れられない [emphasis added]」と明記され、諸々の社会的要因は「暴動を引き起こしたマイノリティのマインドセット」の理由とはならないとの記述がある (“Government Response to the Riots, Communities and Victims Panel’s final report,” 2013, p. 15)。すなわち、政府や保守層に代表される暴動批判は、その原因を暴徒のモラルの低下や責任感の欠如に帰するものであり、上述のインタビューでは多層的だと捉えられる様々な要因は、単純化された「我々」と「彼ら」という線引きのために利用されていると考えられる。また、暴動の源泉となった「怒り」の表出に対しても、暴徒を理性的ではなく一般国民の常識に従わない人々として矮小化する傾向が見られる。従って、キャメロン首相がロンドン暴動を「国家に対する警告 (a wake-up call for the country)」として言及するとき、「彼ら」は国家の枠組みから零れ落ちることとなる。

以上の点からも、ロンドン暴動を論じるにあたっては、ある社会における例外的な無秩序状態を指摘するのではなく、その背後にある排除と包摂のロジックに目を向けることが重要だと考えられる。そこで同暴動が示唆する課題は、他者の身体と特定の感情を結びつけるような構造や、国家によって理想化された歴史の再／生産などの問いをも喚起した。これらの問いはまた、フェミニズムやクィア理論の文脈で広く論じられてきた情動と身体の可塑性や、支配的な歴史に対する抵抗的な視点と密接に結びついている。本稿では、情動の政治性をめぐる議論に焦点を当てつつ、国家の理想 (the national ideal) が美化される一方で周縁化される歴史性や、ネオリベラルな市場経済との関連性に関する考察を試みる。

2 ケーキとカップケーキの比喻：ロンドン暴動に関する二つの言説

ロンドン暴動の収束へと向けたキャメロン首相の演説は、貧困や人種差別、若年層の失業率といった社会的課題を、モラルの低下や機能不全の家庭環境などの個人のバックグラウンドに負わせるものであった。それは同時に、暴徒を「模範的な国民」と対置させる意図を含んでいたと言える。恣意的にも見える暴動の要因の矮小化は、ロンドンで進行するジェントリフィケーションや再開発のアリバイとして働くだけでなく、「家族へのサポート」という名目で国家が私的な領域へと介入するきっかけを生むと共に、緊縮財政に基づく社会保障や教育に対するコストの削減などから目を背けさせる効果を有していたとみられる。社会学者であるピーター・ロジャースによれば、暴動が起きたコミュニティの自浄作用や回復力を求める言説には、「市民が中心となったコミュニティにおける意思決定への参加」を促すと同時に、「市民を意思決定の場から排除しながらも、彼ら自身の安全に対してより大きな責任を負わせる」監視の強化に基づく国家主導の統治機構を支持する側面があった (Rogers, 2013, p. 322)。換言すれば、マーク・ダガンの死に始まった抗議運動は、キャメロン政権下における政策を強固にする形で「壊れた社会」の修復を国家的な課題として提示したのである。よって、暴動への対応が示唆するものとは、社会的な包摂を優先事項として掲げる一方で、マイノリティや社会的変革に関する言説を不可視化するという二重性であったと考えられる。

暴動に対する二極的な反応は、トム・ワイマンが2014年4月8日にガーディアン紙に寄稿した記事から象徴的に読み解くことができる。“Beware of cupcake fascism”と題されたこの記事は、「伝統的なケーキ」と「ファッショナブルでカラフルに彩られたカップケーキ」の寓意的な対比からはじまる。前者がスポンジやジャム、クリームからつくられ、「手をべたべたに (wet and sticky)」するのに対し、カップケーキはきちんと成型され、普段甘いものを好まないような層にも受け入れられる「健全さ (wholesomeness) やノスタルジアの象徴」であるとワイマンは論じる (Whyman, 2014)。では、両者の比較はどのようにロンドン暴動に対する異なる政治的姿勢を示すのだろうか。前者は暴動に参加した、あるいは暴動を支持する人々を、そして後者は暴動を批判する、主に中産階級的な価値観を共有した人々の比喻として用いられてい

る。この比喩が提示する重要な視点は主に三つ挙げられる。第一に、ある階級に属する人々の消費パターンとの対比、次にこの二つの対象が帯びる歴史性への言及、そして両者がいかに特定の感情を喚起するものとして描かれているか、という点である。これらは単に二つの異なる立場を示すだけでなく、その経済的な背景や歴史的含意に対する問いをも投げかけている。まずワイマンは、暴動に付随した混沌状態を「ケーキ的」な反応、すなわちすぐに崩壊する危うさを持ちつつ、変化に対する可能性の表象として定義している。その一方で、中産階級に属する消費者を念頭に置いた「カップケーキ」は、その制限的 (restrictive) な形象ゆえに、所定の／規定された (prescribed) ルールに対して従順な主体や、そのような政治的姿勢を指し示すとし、ワイマンは彼らを、変化を拒絶する「幼児化された大人 (an infantilised adult)」と描写している。加えて、カップケーキに付随する健全さやノスタルジアといったイメージは、既にイギリス社会における文化的な比喩 (cultural trope) として機能しているとしながらも、それらは「誰にも経験されたことのない過去、あるいはビンテージ物の洋服が、理想化された1920年代を想起させるために描く『より完璧な過去』」への憧憬でしかないと彼は述べている。

そこで、ロンドン暴動に対する中産階級的な受動的攻撃性 (passive-aggressive attitudes) は極めて「カップケーキ的 (cupcakey)」なものとして表出したと考えられる。黒人男性射殺に対する市民の怒りを「不潔な」「好ましくない」ものとして排除し、保守的・中産階級的な価値観を強調した反応は、社会的変革への可能性を断ち切るものであった。このような反応は、TwitterやFacebook上で急速に広まった #riotcleanup 及び #Operation Cup Of Tea といったハッシュタグに特徴的に表れている。前者は略奪や放火にあった地域を清掃するための有志を募るものであるのに対し、後者は「暴動に参加するのではなく、家でゆっくり紅茶でも飲もう ("Have a nice cup of tea")」という一見穏健な呼びかけであった。この二つのスローガンはしばしば同時に用いられ、暴動に参加した人々を感情的な他者として描くと共に、暴動そのものが国家の伝統に反する態度だとして非難する姿勢を反映している。新しい箒を手にした何百人もの人々が通りを歩くというイメージは政府の報告書にも取り上げられたが、地域の「浄化」というプロジェクトは文字通り、また比喩的

な意味でも暴動の残した痕跡を抹消する試みであった。彼らの理想とするビジョンは、国家の歴史や伝統と結びついた秩序の形式に則り、「伝統的」「イギリス的」とされる価値観を課すことでそこに帰属しない他者を排除し、「片づける」ことにも投影される。また上で挙げた受動的攻撃性は、第二次大戦中イギリスのプロパガンダ・ポスターとして提案され、実際に使われることがなかったにも関わらず今や代表的なモチーフとなった“Keep Calm and Carry On”という標語が示す「あらゆる状況に対する最も適当な反応は、現状を受け入れ、怒りや誇りを飲み込み、『唇をかみしめる (“stiff upper lip”)』態度に表されるような理想の英国人気質 (Britishness) に従って進むこと」と共通するとワイマンは批判している (Whyman, 2014)。

ひとえに保守的な暴動への対応が、美化された歴史に基づくナショナル・アイデンティティとの同一化へと向かうという側面は、もはやカップケーキが新しい高級な嗜好品であることをも忘れさせてしまうという点で、ワイマンの比喩は痛烈な皮肉として機能する。また着目すべきは、中産階級的なレスポンスが彼ら自身の感情の抑圧だけでなく、とりわけ「怒り」の主体としての他者への非難という形で現れ、両者を差別化する点である。以下では、特定の身体に付随する情動・感情の政治性や歴史性、コロニアリズムとの関連性を論じた代表的な理論家であるサラ・アーメッドの議論を主に扱い、ロンドン暴動への異なる反応が明らかにした人種や階級の分断とネオリベラルな市場経済との共謀関係、またその過程で正当化される歴史性に関する課題が、クィア・ポリティクスの視点からどのように語られうるか読み解く。まず初めに、ワイマンの提示したケーキとカップケーキのメタファーが包含する情動理論との共通項を、前者が「粘着性」「余剰」といったキーワードによって示唆する政治的な可能性と関連づけて議論する。次に、同暴動への批判が投影する「国家の統合性」という幻想が「共有された歴史性」を要請するという点に触れ、そのような欲望がオルタナティブな歴史的語りを求める動きとどのように反発しうるのか、そして歴史的なモーメントとしての現在を構成するのか指摘する。そして最後に、中産階級的な価値観に基づいた受動的攻撃性とネオリベラルな消費主義の接続に関して、ジャスビール・ブアが導入したホモナショナリズム概念を参照しつつ、両者の共犯関係が理想化された国家のあり方を通じて温存される構造

について批判的に論じる。

3 余剰・変容・粘着性：ケーキの政治的可能性と情動理論の交差

上記の記事においてワイマンは、ロンドン暴動に対する中産階級的な受動的攻撃性をファシズムと呼び、同語が喚起する全体主義国家の脅威という一般的なイメージを日常的な文脈へと拡張した。また彼は、ファシズムを「危機に対するある種の反応」と定義し、変化の可能性へと向けられた感情の抑圧を通じて、既存の社会構造を維持しようとするマジョリティによる反応をその最たるものとして挙げている。そのようなファシズムの出現は、レイシズムに対する批判をニッチな主張（niche-appeal）として封じ込め、中産階級的な価値観の押しつけに伴い新たな政治的可能性を遮断するといった暴力性をも孕んでいる。暴動の要因についての考察が階級や人種、貧困に関する異なるオリエンテーションを示したことは、前述のガーディアン紙によるアンケートからも明らかである。だが一方で、保守的な視点からそれらの差異を隠蔽し脱文脈化するような反動が起きたという側面は、そのような反動が全体主義的なイデオロギーを帯びることを示しているのである。また、ワイマンの提示した近代的なファシズムの形態は、暴動に参加した人々の社会的・文化的アイデンティティの軽視にはじまり、「彼ら」の怒りを「イギリス的でないもの」として国家の枠組みから排除することで機能する。そこで、ケーキ／カップケーキというメタファーは特定の消費パターンと呼応するだけでなく、消費する・食べる（consume）対象という二重の意を含む。そして後者は既存の価値観——つまりそれを好む主体が、「よりよい（nicer）世界に対するビジョンは、権威者からの命令（injunction）から派生するものであり、正しく行動し、笑顔でやり過ごそうという試み」を支持する点において——の内面化と共に、身体化された規範のあり方を含意していると考えられる（Whyman, 2014）。

そこで、ワイマンが「ケーキのラディカルな可能性」を論じるにあたって用いたことば、すなわち余剰（excess）、粘着性（stickiness）、そして「オルタナティブな可能性に対して開かれることへの純粋な喜び」は、情動の政治をめぐる近年の議論においても非常に馴染み深いものである（Whyman, 2014）。現象学や認知心理学において主に論じられてきた「情動」概念は、イヴ・セジ

ウィックによる論考を一つの契機にフェミニズム・クィア理論の文脈で広く扱われることとなった。¹ また、身体の物質性をプロセスとして捉える新たな唯物論との接続が、関係性や境界の流動性に焦点を置く情動理論の発展へと貢献したとも言える。しかしその定義は多岐に渡り、以下は様々な理論家がどのようなことばを用いて情動の性質を論じているかを挙げた一例である。

[...] 余剰、自律性、非個人的なもの、[...] 粘着性、集合性、偶発性、閾値あるいは転換点、潜在性（または未来）の遍在性、開かれたもの、クリシェや慣習の領域を循環する活気に満ちた非一貫性 [...]

(Seigworth and Gregg, 2010, p. 9)

とりわけ情動が「余剰」としてしばしば論じられる際に、あらゆる構造やナラティブを越える可能性を提示するものとして描かれる (see *Massumi, 2002*) のに対し、ベン・アンダーソンによる「情動は『コントロール』という名を与えられた権力の新たなモダリティの対象であると同時に、互いに共鳴し干渉しあうような権力の様々な形式によって上書きされてきた」という指摘は非常に重要である (*Anderson, 2010, p. 183*)。言い換えれば、情動を余剰として捉える言説は、その不確定性ゆえ新たな可能性への指向と結びつくものの、既存の権力構造と切り離して論じることが難しい。それはロンドン暴動に関わった人々の怒りが多くの社会問題を浮き上がらせたと共に、彼らを「感情的な他者」として排除する言説が働いたことと密接に関連づけられる。そこで「余剰としての情動」は、既存の政治的枠組みから零れ落ちるものの持つ可能性だけでなく、脆弱性や傷つきやすさをも帯びることとなる。以上の論点を踏まえた上で、以下では「国家の危機」と捉えられる事象が、「怒り」や「嫌悪」に代表される感情を情動の政治としていかに利用しつつ、脅かされる「国家の身体」というレトリックを導入することで、ナショナリズムの称揚と特定の身体を持った「他者」の排除というナラティブを生産するのか考察する。

The Cultural Politics of Emotion の冒頭で、サラ・アーメッドは亡命希望者や移民に対する脅威を主張する *British National Front* のポスターを例に挙げ、「騙されやすい英国 (Soft Touch Britain)」の社会保障の恩恵を受けようとす

る「彼ら」によって国家の境界が簡単に崩壊しようというレトリックについて論じている。同ポスターは大文字の「あなた (YOU)」へと向けて書かれており、個人の身体と侵食される国家の身体は物質的なレベルにおいても容易に混同される。そして名指される「あなた」と同一化することは、国家の敵と見なされる他者に対する怒りといった特定の感情を共有することでもある。また、ここで述べる「国家の身体」という概念は、単に国家の地政学的な境界を示すのではなく、ある歴史性や家族の形態、人種に関する規範が具現化したものであると同時に、その内部に取り込まれた人々のアイデンティティを表象する。すなわち、「白人の国家」の危機は個々の「白人の身体」に対する脅威として容易にすり替えられるのである。しかし、そのような集合的な身体は、それに属さない「他者」の身体に意味や価値が与えられることによって初めて生じる。そしてその手続きは、「行動の反復や、他者へと向かう、あるいは離れるような指向性」を通じて感情が身体の表層を構成することに基づく (Ahmed, 2004a, p.4)。例えば、国境が移民によって侵犯されるという危惧 (border anxiety) は、他者との近接性 (proximity) によって自らの身体的な境界が危ういものとなるという不安を包含する。以上の文脈において、国家の「騙されやすさ/柔軟性 (softness)」は、他者によって介入・変容される境界の脆弱性を意味するだけでなく、国家が女性的なものに見なされるというリスクを暴くとアーメッドは指摘する。その結果、国家に対する「暗黙の内に頑健で (hard) タフであること、つまり感情的にならず、より閉ざされ、簡単に動揺してはならないという要請」が働くのである (Ahmed, 2004a, p. 2)。この引用は、ワイマンによるケーキとカップケーキの比喩と明確に呼応するだけでなく、暴徒への対応について「厳しい愛情 (tough love)」が必要だと述べたキャメロン首相のコメントに反映されている。つまり「敬意や互いへの尊重だけでなく、愛情が欠如している。しかし、彼らが法を破るほど度を越したとき、私たちはタフでなければならぬ」という主張は、国家がその境界を維持しつつ他者のコントロールを行うためのレトリックとして「愛」や「頑強さ」が用いられる点を示唆しているのである (“Rioters need tough love, says David Cameron,” 2011)。とりわけ手をべたつかせる「余剰」によって特徴づけられ、社会的変革を希求する人々を象徴するケーキに対し、「カップケーキ

的な」きちんと成型された外見が自制や潔癖さと結びつけられるという視点において、後者は理想化された国家のモデルとして機能する。そこで、ロンドン暴動の直後に見られた有徴化された他者（若者・非白人・貧困層）に対する受動的かつ攻撃的な反応は、脅威に晒された国家の騙されやすさ／柔軟性と、理想とされる頑強さの両者を露呈する。すなわち、中産階級的な主体が厳格な規範を他者に課するという攻撃性と表裏一体であるような、それを覆い隠すような穏健さや受動性は、対立項としての「感情的な他者」を生み出すことによって彼ら自身を特権化するのである。

また、国家の境界を脅かす他者の再／生産に寄与する戦略的な反応は、アーメッドによる **passion** と **passivity** という語を用いた感情の抑圧と受動性に関する考察と不可分である。すなわち、「受動性に対する恐怖は、感情性 (**emotionality**) に対する恐怖と結びつき、弱さは他者によって形づくられるという傾向によって定義される」という側面は、暴動に対する批判が「冷静さ (**calmness**)」を強調した点から垣間見えるように、自らの感情性の隠蔽と、感情を他者に付随させるような二面性を生み出す (Ahmed, 2004a, p. 2)。さらに、暴徒が「片づけられる (**clean-up**)」対象、あるいは嫌悪 (**disgust**) され排除される対象として見なされる際に、ワイマンが「伝統的なケーキ」の例を用いて挙げた粘着性や「手を汚すもの」というイメージは、アーメッドが提示した重要な概念である粘着性／くっつきやすさ (**stickiness**) と重なり合う。嫌悪の生産と粘着性のアナロジーについて、アーメッドは「粘着性は皮膚の表面が危機にさらされたときのみ、つまり何かべたべたするものが私たちにくっつくこととする (“**what is sticky threatens to stick to us**”) ときのみ極めて不快なものとなる」と述べている (Ahmed, 2004a, p. 90)。つまり嫌悪の感情は、何か異なるものを取り込む際に引き起こされる「表層」の変容によって生じると考えられる。だが、他者を内面化するプロセスは同時に、主体が存続するための条件となるというジレンマを顕在化する。そのようなジレンマは、「(ある対象を) 嫌悪することは結局のところ、彼／女が拒絶したまさにそのものによって影響を受けている (**to be affected**) ことを示す」という構造を暴き出すのである (Ahmed, 2004a, p. 86)。加えて、身体的な近接性に基づき歴史的に「汚れ (**dirt**)」とみなされてきた他者を取り込むという実践は、境界

の変容に対する恐怖を呼び起こす。そのような実践はまた、ジュリア・クリステヴァがアブジェクション概念を用いて、主体の形成は「『私』と対立するもの」の棄却に依拠するが、排斥される対象は主体と完全に切り離されえないとした議論を反映する (Kristeva, 1982, p.3)。そこで「私 (the I)」と「私ではないもの (the not)」との関係性は、あらかじめ措定されているのではなく、常に化する。従って、「粘着性」が主体と客体／対象を結びつけ、情動の転移を通じて主体を変容させる力を持つという寓意は、何か異なるものとの接触や邂逅を持つ潜在性を意味するのである。

しかし、感情が付着する対象の他者化と内面化のあいだを横断する言説は、単に流動的で変化を促すものではなく、「粘着性」が特定の歴史性を帯びるという点は看過してはならない。すなわち、主体が接触を通じてある対象を「嫌悪すべきもの」と見なす過程は、決して自然発生的なものではなく、粘着性は「身体や客体／対象、そして記号との接触における歴史性の結果」として捉えられるのである (Ahmed, 2004a, p. 90)。そして「我々」「理性的な、感情的でない人々」といったカテゴリーもまた、接触によって問い直され、新たに名づけられると共に、そのような問いは「他者」の身体が継承するオルタナティブな歴史性へと目を向けさせる。ワイマンの比喩を用いれば、あたかも「正当な歴史」を主張するカップケーキ的な主体は、より多様かつ複雑な他者の歴史を隠蔽し、余剰として切り捨てるのである。一方でケーキに象徴される政治的可能性は、主体の形成にとって必要不可欠であるような、切り捨てられてきた周縁的な歴史性に関する省察を促す。そして「手をべたべたにする」ケーキの粘着性が変化の可能性と同一に語られるとき、感情性に対する恐怖によって維持される中産階級的な価値観を帯びた「国家の身体」は、そこから排除された他者としての暴徒との近接性によって常に変容しうることを意味するのである。それは暴動の痕跡を「片づける」いくつかのプロジェクトに参加した人々が、暴徒の怒りの痕跡の抹消だけでなく、自らの「冷静さ」を様々な手段によって主張することで、暴徒との差異の強調を試みた点からも見受けられる。そこで次節では、感情と身体性の結びつきを正当化する歴史的な語りが、どのように「国家」の名の下に動員されるかについて詳細に論じる。

4 砂糖漬けの過去：危機の政治における歴史性の構築

前節では「他者」の身体と特定の感情の結びつきの固定化が、「我々」「彼ら」という個の身体に基づく分断のみならず、その背後に存在する国家の境界／表層の保持と密接に結びつくという点について論じた。本項では、国家が危機に直面した際に、理想化された歴史的な語りがどのように導入されるかについて議論する。そこで、ワイマンがカップケーキを「誰にも経験されたことのない完璧な過去」へのノスタルジアを呼び起こすものとして描出している点は重要である。また、カップケーキを好む人々がその「素晴らしさ (niceness)」を「現実世界に欠けているもの」として認識している、というワイマンの指摘は、歴史性の欠如をも意味している。すなわち「カップケーキ的な」過去への憧憬は、保守的かつ中産階級的な主体が、想像上の歴史性をいかに「国家の理想」を達成するための条件として取り込むかという問いを含んでいるのである。以上を踏まえた上で、ロンドン暴動に対する反応が特定の歴史性を正当化し「他者」の排除を肯定する図式について、オルタナティブな歴史的な語りを求める「クィアな歴史編纂 (queer historiography)」や、希望と不可能性に満ちたパラドクシカルな「現在」の維持へと向かう「残酷な楽観主義」の視点からの考察を交えて以下では批判的に分析する。

ロンドン暴動と理想化された過去が結びつけられた一例として、地域の問題解決に取り組む社会的企業 (CIC) である Community Resilience UK のレポートには、以下のような文言がある。

私たちのインスピレーションは、第二次世界大戦中に生まれ、それ以降イギリス文化に深く根付いた "*Blitz spirit*" であり、それは最近では 2011 年のロンドン暴動後の清掃 (clear-up) にも表れている。この精神は、我々が攻撃される前にそれに備えて事前に考えることを要求する。また、誰もが彼ら自身のみならず他者の面倒を進んでみようとする態度をも意味している。[...] これはストイックな勇気と忍耐力に基づく精神であり、「コミュニティ」や真の公的サービスの根幹となるものである [emphasis in original]。 (Community Resilience UK, 2012)

重要なのは、同CICの活動がコミュニティの活性化を促すことを目的とする際に、用いられる比喩が第二次世界大戦まで遡った国家の精神性を理想として描いている点である。前述のピーター・ロジャースは、暴動の帰結が市民間の監視や情報共有の強化へと繋がることを危惧した上で、上記の引用に触れ「個人の行いを馴化させることは、『英国人氣質 (Britishness)』として美化された理想に対する順応性を奨励するための手段となる」と指摘している (Rogers, 2013, p. 326)。ワイマンが“Keep Calm and Carry On”という戦時中のスローガンを挙げて中産階級的な主体の言動を描写したのと同様に、Britishnessという理想はある歴史的なモーメントを強調することで具現化すると考えられる。だが一方で、基準となる歴史的な出来事、およびそれが示唆する「理想的な国民性」は政治的なプロパガンダに容易に回収される。エリザベス・フリーマンは、国家によって与えられうる公的な歴史 (official history) が基づく時代区分の指標について、次のように述べている。

国家から個人に至るまで、中産階級的でリベラルな主体は、ともすればすぐに人種化・ジェンダー化され、また性的なものとしてされるような、狭小かつ進歩に関するクロノポリティクスの枠組みの内部で定義される。例えば西洋の「近代」は、茶色の肌をした (brown-skinned)、女性的な、そして性的に倒錯したと見なされる緩慢な前近代に対して、それ自身を進歩的なムーブメントとして表象する。物質的なレベルにおいて、大規模な (large-scale) 時代区分のメカニズムは、何が社会形成のプロセスとして、あるいは個人の人生として生きられるかを形づくるのである。 (Freeman, 2005, p. 57)

言うまでもなく、以上の歴史生成のプロセスにおいて中心となるのは特権化された主体であり、彼らの生は「意味あるもの」として公的な時間軸に記録される。それに対して、進歩のロジックやリニアな時間性に依拠しない、ともすれば失われ忘れ去られる個の身体的な経験は、オルタナティブな語りとしての歴史を考察するための重要な視点を提示する。上記のフリーマンの論文の題目“Time Binds”が示すのは従って、過去に存在した形象との「繋がり (connec-

tivity)」のみでなく、「愛の絆——今ここにおけるアタッチメントだけでなく、時間的・空間的な障壁をも越えて築かれた絆」や、「どこかへ『向かう』こと」、そして同時にある時点に「捕らわれていること」を意味する (Freeman, 2005, p. 61)。多方向へと向かう複数の歴史性は従って、次節で論じるネオリベラルな進歩の言説と常に対抗する可能性を有しており、支配的な歴史から取り落とされてきたものを掬い上げる役割を担うのである。

同時に、歴史に関する語りの複数性は、語り手のアカウンタビリティを重要な問いとして示す。例えばダナ・ルチアーノが「クィアな歴史編纂」として提示した試みは、「異なる形で時間性と出会うことを約束しながらも、わたしたちはこれらのクィアな歴史と熱心に、だが一定の距離を置いて向き合わねばならない」という課題を残している (Luciano, 2011, p. 149)。また、クィアな形象と近代的なセクシュアル・アイデンティティの歴史についての著作で知られるヘザー・ラブは、歴史横断的な (cross-historical) ナラティブの連続性を重視し、過去を美化するような言葉で語る批評家について批判している。ラブによれば、過去と向き合うことの困難は、それが常に矛盾を帯びている点にある。つまり「困難な過去と後ろ向きに (backward) 対峙すると同時に、『喫緊の、拡大する政治的論点』へと前向きに (forward) 目を向けなければならない」という二重の要請が常に立ちはだかっているのである (Love, 2007, p. 18)。過去へのアプローチが、ある形象の現在へと残した痕跡を辿ることを意味するのであれば、歴史の語り手との同一化の不／可能性や差異は見落とされてはならない。そこで、過去の理想化や恣意的な領有へと警鐘を鳴らす両者の議論に対し、ロンドン暴動という「危機」における想像上の過去へのノスタルジックな憧憬や同一化が「失われたはずのもの (what must have been lost)」の獲得を意味し、中産階級的で普遍的な価値観を維持するために収奪される危険性を帯びるといふ点は考察に値する。では、ワイマンが「想像上の過去」と呼ぶものに対するアタッチメントや欲望は、どのように構築されるのだろうか。

ローレン・バーラントによる「残酷な楽観主義 (cruel optimism)」という概念は、集合的なファンタジーを読み解くための重要な鍵となるだろう。同語は、ある欲望の対象に対するアタッチメントが、主体の存続を可能にしつつも

脅かすという二つの側面を包摂することを意味し、「(アタッチメントの) 形式の継続性は、ある主体が生存し続け、この世界に存在し続けるという期待が意味するものに対してもある種の継続性を与える」楽観性の形態を表す (Berlant, 2011, p. 24)。ここで挙げる「アタッチメント」とはすなわち、関係性の構造 (a structure of relationality) を意味し、連続性 (continuity) や繋がりを維持しようという欲望の根幹となる。² バーラントは、あらゆるアタッチメントは楽観的であるとするものの、それがあつ対象／場面 (object / scene) に投影された可能性の維持へと向かうとき、残酷なものとなると指摘している。とりわけそれらが「よき生活というファンタジー (good-life fantasies)」を構成すべく動員されるとき、その対象としてはリベラルな資本主義社会が約束すると考えられるもの、すなわち社会的・政治的平等や社会階層の上昇、職の安定、永続的な親密性などが挙げられる。こうした対象の希求と結びつけられる「日常性 (ordinariness)」は、「多くの力や歴史が循環し、『引き継がれうる』ものとなる交差の場」であり、「新たな生のリズム——いかなるときでも規範や制度、様式へと凝固しうるリズム」を生み出す (Berlant, 2011, p. 9)。ここで述べる「日常性」とは、可能性に満ちた「永続的な現在 (an infinite present)」を支えるための概念であり、決して達成されざるものとして維持されるという残酷さを帯びるのである。さらに、バーラントが日常性を「危機によって形成された袋小路」と定義している点からも、危機の政治と想像上の日常性は互いに相補的な役割を果たす。だが言うまでもなく、「危機」とは既にそこに存在するものではない。ロンドン暴動から導かれた「国家の危機」という言説はむしろ、「事実／形象／出来事を解釈し、独り歩きするようなフェティシズムの対象——つまり脅威の根源として解釈することができ、国家が宣戦布告する根拠となる対象——としてそれらを変容させる」ための宣言 (declaration) を通じてパフォーマティヴに構築されたものだと考えられる (Ahmed, 2004b, p. 132)。そして危機に組み込まれた日常性は、危機がもたらす苦痛や暴力を保持しつつ、主体の存続を約束する対象を「歴史上の確かなエビデンス」として成立させることで永続的に機能するのである (Berlant, 2011, p. 54)。興味深いことに、「危機の生産」を通じたファンタジーの共有は、リベラルで中産階級的な主体が描く理想を留め置くだけでな

く、それにアクセスすることができない「他者」の希望を引き延ばすことによる抑圧へとも転じる。すなわち、希望と不可能性を内包するアンビバレントで残酷な楽観主義は、欲望される対象／場面へと歴史的な意義を与えつつ継続されるのである。

「よき生活というファンタジー」への欲望は、「歴史性の『不在の存在（'absent presence' of historicity)』」が暫定的な「平凡で善良な主体」を生み出すことによって、同一化と理想化の境界を曖昧にするというアーメッドの主張とも関連づけられる（Ahmed, 2004b, p. 120; 2004a）。前節では「国家の身体」と同一化されるような個の身体が、情動的なプロセスを経て生産される点について述べたが、国家の理想を強化するような「想像上の歴史」と規範的な主体は相互依存的な関係性にある。重要なのは、同一化があらかじめ欠如に基づいている——ある対象へと接近する欲望に依拠する同一化の過程には、主体が未だに「その対象」ではないという条件が課されるという点である。国家に対する「愛」という名目で正当化される同一化の欲望が、「よき生活」を約束するはずの国家の失敗をも覆い隠すという側面について、アーメッドは以下のように述べている。

希望と、「国家はこうであったかもしれない（how it could have been）」というノスタルジアを介して人は国家を愛する。彼／女は国家への愛が報われなかった、あるいは今後も報われないことを認識する代わりに、国家を愛し続けるのである。（Ahmed, 2004a, p. 133）

国家への愛が報われる、あるいは「よき生活」の達成という形で国家から愛が返還される（returned）という希望は、国家に対する愛の「投資（investment）」が引き延ばされる条件ともなる。つまり「国家への愛はその希望を次世代へと繋ぐ、すなわち理想の遅延が『愛の返還』というファンタジーを維持する」のである（Ahmed, 2004a, p. 131）。バーラントとアーメッドの議論はいずれも、過去へと投影した理想が未来において達成されることを望む行為が、一方で理想化されたナラティヴを提供する「国家」の地位をより強固にすることを示している。ワイマンの記事で言及されている「経験された

ことのない過去」とノスタルジアの結びつきはつまり、欠如を前提とした達成不可能な理想を描くことで、国家を継続させる次世代を再生産する装置としても機能するのである。その結果、過去への憧憬は「中産階級的でリベラルな主体」の価値観を、歴史的な正当性を帯びた普遍的で集合的な概念として維持し、変化の可能性や異なる歴史的な語りを「残酷にも」遮断することとなる。

5 「カップケーキ的な消費社会」とホモナショナリズムとの親和性

ロンドン暴動に対する保守的な反動が、ノスタルジアに基づく美化された過去や「他者」の感情の抑圧によって達成される国家の理想を浮き彫りにしたのに加え、中産階級的な消費パターンとジェントリフィケーションの図式が前景化したことは着目に値する。暴動の直後、ハーバード・ビジネス・レビュー誌は「ロンドン暴動とネオリベラリズムの勝利」と題された記事を掲載した。すなわち、緊縮財政や様々なインフラの民営化に代表される新自由主義的な政策は、暴動の要因と考えられる経済的格差を生み出しただけでなく「物質的な成功と消費が人生において最も望ましい要素である、という絶え間ないイデオロギー的な強調」を繰り返す行いで、その「勝利」は暴徒までも「そのシステムの内部で成功せずとも、同じ価値観を適用する人々」として取り込むことを意味する (Milanovic, 2011)。また、ジグムント・バウマンは「我々は誰もが消費者である」とした上で、彼らの怒りが略奪へと向かった点について、次のように論じている。言わば「消費者としての享楽が満たされることが満ち足りた人生を意味する」社会において、彼らは「欠陥のある (defective) 消費者」であり、「憤怒や屈辱、恨みや妬みは『持たざること』、または彼らに持つことを許さないものによって生じる」のである (Bauman, 2011)。加えて、暴動のさなかで行われた略奪行為がとりわけショッキングなものとして報道されることで、暴徒の動機を脱政治化するという意図だけでなく、「彼ら」もまた中産階級的な市場経済への参与を望んでいるという主張が広まることとなった。そこで、略奪の原因は貧困ではなく「彼らが手に入れられるはずのない、にも関わらず重大な価値を置くもの」を強奪するというモラルの欠如や犯罪性へと置き換えられる。つまり消費者としてのステータスが最も重要な市民の条件となる社会において、「(略奪に参加した) 若者が最もあからさまな富や権力

の象徴に矛先を向けると同時に、実際は彼らもその一部を望んでいる」という構図は、その根底にあるネオリベラルな価値観を温存するのである (Wall, 2011)。よって、ロンドン暴動に対する批判とのネオリベラリズムの関連性は、保守的な家族観やモラルの強化、自己責任の論理などの視点から広く議論されてきた一方で、特権的な消費主義が及ぼす影響とその含意という側面からも注視する必要がある。

ワイマンは前述の記事で“Reasons to Believe” というコカ・コーラの企業キャンペーンに用いられたイメージを、特定の消費行動に基づく「カップケーキ的な楽観主義」の具体例として挙げている。2011年に開始された同キャンペーンは「よりよい世界を信じる理由はある」という共通のスローガンの下にいくつもの短いビデオで構成され、各国によって使用される映像の違いはあるものの、基本的には対照的と見なされる二つのイメージと短いフレーズの組み合わせが続く。2013年にイギリスで放映されたバージョンでは、一台の戦車と何千個ものケーキ、警察から逃げる一人の人物の映像と献血に協力する何百人もの人々、一枚のレッドカードと12回のお祝いのハグ、といった映像が対比されている。中でも最もあからさまな対立項は、憎悪と愛の表現としてキャプションが付けられた二つのイメージである。前者はロンドン暴動の報道映像に“a display of hatred”という文字が重なり、後者は“5000 celebrations of love”という表示とともに白人男性二人の挙式の映像が流れることで、両者の対比が行われている (see Figure. 1)³。このキャンペーンのイギリスにおけるマーケティング・ディレクターであるブリッド・ドロハン＝スチュワートは、その戦略が「彼らと密接に関連したトピックについて、人々に感情的なレベルで語りかけ、幸福と楽観主義を広めること」を目的としていると述べ、「誰もが同ブランドに対して、幸せな記憶を呼び起こすようなノスタルジックなつながりを持っている」という仮定に基づくとしている (Faull, 2013)。この広告が多重に問題含みであると考えられるのは、「ネガティブ」なものとして描かれた出来事を恣意的に脱文脈化しているだけでなく、感情を喚起することを意図した語りが、何が彼らの生活に「関連する」トピックであるのか予め提示し、支配的な価値観を反映・強化しうる点である。さらに、幸福な記憶と結びついて立ち現われるノスタルジアは、強迫的にも「よりよき未来」へと向

かう指標として繰り返し用いられるのである。

では、ロンドン暴動の映像を用いた同広告は、マーク・ダガンの射殺に対する「怒り」の意味をも取り去ったのだろうか。また、「憎悪の表出」として描かれた略奪行為の、憎悪の対象とは何だろうか。望ましい「愛」の称揚と対照的に、暴動の発端となった「怒り」があたかも「憎悪」の露呈と見なされることによって生じるのは、それが「我々」の暴徒に対する憎悪が、

「彼ら」が示した「我々」に対する憎悪として読み替えられるようなレトリックである。その他のイメージからも明らかになる通り、比較された二つのイメージの前半は「望ましくないもの」、後半は「好ましいもの」として描かれている。しかし、暴動の一瞬を切り取った映像において、暴徒は「望ましくないもの」として描写されている一方で、憎悪する主体は「我々」＝マーケティングの対象者ではない。反対に、「彼ら」が憎悪を表す (display) 主体として記述されることで、その対象は我々＝消費者であるかのような錯覚させる効果を持つのである。「ひとつの」憎悪の表現が5000回の愛の祝福とどのように対応するのか、そして「統計に基づく」とされた数字がいかにある感情の強度や優劣を正当化するのか、という問いに加えて、とりわけ愛と憎悪の対称性についてはアーメッドが「表層化 (surfacing) の効果」と呼ぶ、「他者に対する否定的なアタッチメントは同時に、例えば『白人の』というシニフィアンを反復を通じて構築された、想像上の主体に対する肯定的なアタッチメントとして再定義される」情動的なプロセスにより補強される (Ahmed, 2004b, p. 118)。コカ・コーラの広告においては、白人のゲイ男性が「愛」のシニフィアンとして描かれている。よって同キャンペーンは、ある対象と結びついた「憎悪」が数値においても強度においても「愛」によって克服されるべきだとする要請を示唆し、両者の分断は「よりよい世界」への希望の布石として機能するので

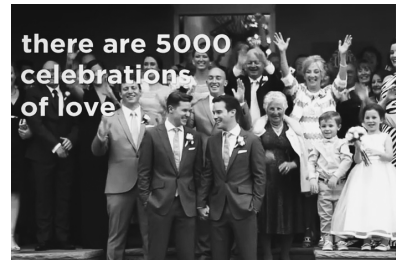


Figure 1. "Coca-Cola indulges gay couple in new ad — in some versions." (2013). Retrieved from <http://dot429.com/articles/3747-coca-cola-includes-gay-couple-in-new-ad-in-some-versions>⁴

ある。

消費のパターンや文化的固有性に裏打ちされた感情の政治的動員は、これまでに論じたロンドン暴動に関する言説が国家の統合性を主張するために用いたロジックと共犯関係にあると言える。中産階級的な価値観の肯定と結びつく「カップケーキ的な楽観主義」は、消費行動を通じてその優位性を常に維持するのである。そこで、暴動の映像に対置された同性婚のイメージについて、ワイマンが「同性パートナーシップに関する、政府の周回遅れの認識が解き放った愛の潮流」として着目している点は非常に興味深い (Whyman, 2014)。前節で扱った「理想化された過去」へのノスタルジアと、コカ・コーラの広告に代表される進歩のナラティブは一見相反すると思われるが、いずれも社会的課題を他者に負わせ、彼らを啓蒙あるいはジェントリフィケーションの対象とすることで成立するのである。さらに、「よりよい世界を信じる」という指向性こそが、これまでに論じた受動的な政治的姿勢を裏付けるものとして働くと考えられる。以下では、ジャスビール・プアによるホモナショナリズムの議論を引用し、国家が正当化する支配的な価値観と消費の関係性を考察すると共に、その背後にある他者の排除というレトリックに言及する。

まず近年のクィア・ポリティクスとネオリベラリズムの接点を考察するにあたって重要なのは、セクシュアル・ポリティクスが「自由な」市場や愛国心を推進する「国家のメインストリーム」と強固に絡み合う点を指摘するためにリサ・ダガンが導入した「ホモノーマティヴィティ」概念である。同概念は「同性愛者を支持基盤とする選挙区の解体や、家庭生活や消費に縛り付けられた、私的で脱政治化されたゲイ・カルチャーを約束する一方で、支配的でヘテロノーマティブな仮定や制度に異議を唱えず、むしろそれらを支持し持続させるポリティクス」として定義づけられる (Duggan, 2003, p. 50–51)。その過程で公的／私的領域の境界は再設定され、主に婚姻や軍隊への所属を通じた同性愛者の「自由な」市場への参入や愛国心は称揚されるものの、それらは国家によって是認された異性愛中心主義を暗黙の了解とすることで初めて許容されるのである。また同概念を「性的な例外主義 (sexual exceptionalism)」と関連づけて発展したホモナショナリズムの言説は、危機において国家から除外される他者と、人種・セクシュアリティ・消費社会との接続に焦点を当てている。

9. 11以降のアメリカにおける「国家の連帯」という語りと、同時に立ち現われた新たな生政治の形態へと着目したジャスビール・プアは、ホモナショナリズムを「国家と、その近代性や人種的・階級的なヒエラルキーとの結びつきが、リベラルな主体性を模倣し再び中心に置くような正当で（*upright*）順応的なクィアネスと、制御不能で縛り付けることのできないクィアネスを分断する決定的な要因」として定義している（Puar, 2007, p. 47）。すなわち「白人の」「男性的な」「愛国者の」「豊かな消費者」という承認を得て初めて、同性愛は規範的な国家の身体に「例外的に」組み込まれるのである。また、プアの文脈における「例外性」は、アメリカという国家の特異性を強調するだけでなく、その価値観を普遍的で尊重されるべきものと見なすような要請と両立する。とりわけ同性婚の推進が文化的な優位性を獲得するとき、それは保守的な結婚観を肯定し、文明的で世俗的な国家のアピールに加え、市場経済の促進と関連づけられる。キャメロン首相が「家族の復権」を暴動後の課題として挙げ、公的領域のみならず私的領域への国家の介入を主張した通り、婚姻と結びついた保守的な家族観は同性婚への寛容さの裏で「最も重要な幸福への指針」として温存されるのである（Ahmed, 2010, p. 6）。

以上の議論を踏まえた上で、前述のコカ・コーラのキャンペーンとネオリベラリズム、同性婚を進歩的で国家の寛容さの表れと見なす言説に共通するのは「状況は（今より）よくなるはず」という楽観主義であり、未来への指向性だと言える。それは2010年に立ち上げられたIt Gets Better Projectという若年層LGBTの自殺を防ぐためのプロジェクト名そのものに反映されている。このスローガンが含意する姿勢はすなわち「我々が物事を改善する」のではなく「物事はいつかよくなる」という受動的な楽観主義である。そこで、プアが同プロジェクトを「金融資本主義における、特権的なジオポリティクスを指示する情動的なアタッチメント」を喚起し、LGBTの若者の自殺を国家の文化資本にとっての喪失と見なすとして批判している点は驚くに値しない（Puar, 2011, p. 149）。このプロジェクトが広く知られるきっかけとなったタイラー・クレメンティの死は、彼のルームメイトがウェブカメラで彼が同性と性行為を行っている場面を撮影し、インターネット上に拡散しようとしたことが原因であった。しかし、「it gets better」という包括的なフレーズは、ホモフォビアや

レイシズム、インターネット上のLGBTに対する誹謗中傷や憎悪犯罪の拡がりといった個々の問題に対して人々の目を向けさせるのではなく、より多くの共感を呼ぶことを目的としていたと見られる。同スローガンは、シンパシーや情動の喚起による連帯を示唆し、「自身を、都会的でネオリベラルなゲイの集団に組み入れるための日常」を表す標語として、差異や類似性に基づくアイデンティティ・ポリティクスの代わりに文化資本の獲得や喪失というイデオロギーによって特徴づけられるのである (Puar, 2011, p. 151)。シスジェンダーかつ中産階級に属する白人ゲイ男性に限って状況は良くなるだろう、というプアの批判は、そのまま理想の愛の形としてコカ・コーラの広告に表れている。なぜなら、愛のシニフィアンとしての同性婚もまた、「ただ単に異性愛規範と対になるような平等の要求ではなく、白人の特権性や権利——とりわけ所有や相続の権利——を回復させるための要求」と密接に結びつくことで、国家がクィアな身体を承認するだけでなく監視・管理するための手段として動員されるためである (Puar, 2007, p. 29)。

同様のレトリックを通じて機能する「カップケーキ的な消費主義」は、消費行動が国家への愛として直接置き換えられるような利益の追求の中で生まれたと考えられる。ワイマンが着目した同性婚と暴動の対比が、製品に対するノスタルジアを介した市場の拡大や保守的な婚姻制度を肯定的に強調している点は明らかである。同広告の手法は一方で、暴徒の多くが貧困に苦しみネオリベラルな市場へと参入できないという背景を取り払い、彼らの憎悪が理想的な消費者への憎悪、転じて国家への憎悪へと変容させられる過程を示唆している。従って、同性婚が表象するような「よりよい未来」への共有されたファンタジーは、それを阻む「他者」が望む社会的変革を逆説的にも「進歩への抵抗」として排除し、彼らの多様なバックグラウンドを不可視にするのである。以上の観点から、ホモナショナリズムの言説が、同性愛者の権利の拡充や、順応的なクィアネスの特権化を通じた社会の寛容さのアピールとして用いられる反面、「国家」というカテゴリーは依然として介入されないまま留まることが分かる。重要なのは、何／誰が国家にとって優先されるべきかという価値判断が常に働き、その中で切り捨てられる他者は市場への貢献の度合いによっても差別化される点だと考えられる。言い換えれば、カップケーキ的な消費者が「よ

りよい世界を信じる」理由は、国家が彼らの理想とするネオリベラルで自由な市場における利益を約束する限り、維持され続けるのである。

6 結論

本稿は、ロンドン暴動に関するトム・ワイマンの記事を参照し、同事象を近年のクエア・ポリティクスにおける重要な議論と関連づけて論じた。暴動についての二極的な反応から推察できるのは、国家の理想が複雑な歴史化のプロセスによって保持される反面、ネオリベラルな市場経済への参入が優先される社会において、人種や階級、貧困といった差異の脱文脈化が進むという側面である。また、「国家の身体」と対置される「他者」が、危機の宣言を通じて偶発的に再／生産される構造についても同記事は省察を促している。さらにワイマンの比喩が画期的であったのは、暴徒の身体と中産階級的で規範的な身体が「何を消費／体内化するか」によって意味づけられる過程や、怒りや憎悪、愛の情動的な循環における政治性と歴史的な含意について論じたためだと考えられる。そこで、中産階級的な主体が、保守的な価値観を温存し国家の理想を体現するのに対し、「ケーキ的な」可能性は余剰や粘性に表される変化の潜在性にあるとワイマンは主張する。だが同時に、これら二つの比喩が既に蓄積された文化的な「集合体 (constellation)」として認識されうる点は見落としてはならない。つまり、ケーキとカップケーキという形象に投影された二項対立的な分断は、互いに「開かれた可能性」や「よりよき未来」といった楽観主義を内包する一方で、既存の価値観を維持するために回収されてしまうという危機を生じさせる。それはワイマンが初めて「カップケーキ的なファシズム」に言及した、彼のブログのタイトルと冒頭の但し書き「無限の希望に満ちたブログ——でも君のためではない」が示す、希望の永続性と「君」という誰か＝他者の排除というロジックに皮肉にも反映されている (Whyman, 2013)。このように「我々」と「彼ら」を分断する境界生成の論理は、容易に解体することはできない。だが同時に、ロンドン暴動から派生した社会的・政治的課題が示唆する、特定の身体性と感情の強固な結びつきと、それらを維持するために動員される「想像上の過去」への憧憬は、国家がその普遍性と統合性を保持するための戦略として批判的に読み解くことができる。さらにネオリベラルな消費

社会への参入が、国家による承認の条件となるという議論は、LGBTの権利が市場価値との関連性によって推進されるという問題と重なり合う。そこで本論文で導入した、情動と国家の身体、ホモナショナリズムの視点における同暴動に対する考察からは、同時代的なボディ・ポリティクスの議論が、一つの「危機」を契機とした包摂と排除のダイナミクスへと着目するための抵抗的な視点を提示すると言えるだろう。

Footnotes

- ¹ セジウィックは、「情動は、事物、人々、概念、感覚、関係 (relations)、活動、意思、組織、また他の情動を含む多くのものと結びつき、あるいは結びつきうる」と定義している (Sedgewick, 2003, p.19)。
- ² バーラントはアタッチメントを「関係性の構造」と定義しているが、感情や情動もまた様々なあり方で関係性へと付随する (attach) と述べている。そこで、感覚的な領域で生じる情動的なアタッチメントは、「残酷な楽観主義」における達成されることのないファンタジーが、歴史性に裏打ちされた直観 (intuition) を伴い、規範として成立する際に不可欠な要素だと捉えられる。またバーラントは、楽観主義における欲望の対象 (an object of desire) は「一塊の約束 (a cluster of promises)」と言い換え可能だとしている (Berlant, 2011, p. 23)。しかし、欲望の対象との近接性は「対象が約束してくれるもの」との近接性を意味するため、対象を手に入れる=近接性が消失することはその喪失に対する恐怖を生む。その結果、近接性・関係性の維持を通じて世界の連続性 (continuity) を保つことが主体の存続に関わる最も重要な要請となるのである。
- ³ アイルランド版の広告では、同性婚を挙げるカップルは、白人男性と黒人女性の結婚式の映像に置き換えられた。「憎悪の表出」が同じくロンドン暴動における略奪行為を扱っていることから、同性婚と異人種間の婚姻は「社会における望ましい進歩」の象徴として代替可能であるかのように導入されている。そこで憎悪の表現は普遍化される一方で、愛の表象が意味するものは、ある社会に固有な寛容性や進歩のナラティブを補強するものだと考えられる。同性婚だけではなく多様な人種についての寛容さが、より多くの「他者」を取り込むことによる国家の理想の達成のためには不可欠なものとして利用される点に関しては、アーメッドの提唱する「多文化主義的な愛 (multicultural love)」や、移民へと課される文化的な同化政策に基づく「条件付きの幸福 (conditional happiness)」についての論考も参照のこと (Ahmed, 2004a; 2010)。また、これらのイメージのすり替えについての批判は様々なメディアで取り上げられたが、企業側はこの判断を消費者のリサーチに基づくものとし、当時アイルランドで同性婚が認められていなかったことを理由に挙げた。
- ⁴ 本画像は、LGBTに関する情報を発信するオンライン・プラットフォームの一つである FourTwoNine に掲載された、2013年のコカ・コーラの広告キャンペーン映像からの抜粋である。この画像を含む記事の詳細は以下を参照のこと。Welsh, Morgan. "Coca-cola includes gay couple in new ad — in some versions." (2013,

December 30). FourTwoNine. Retrieved 10 December, 2015,
from <http://dot429.com/articles/3747-coca-cola-includes-gay-couple-in-new-ad-in-some-versions>

References

- Ahmed, Sara. (2004a). *The Cultural Politics of Emotion*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Ahmed, Sara. (2004b). "Affective Economies." *Social Text*. 22. 2, 121–139.
- Ahmed, Sara. (2010). *The Promise of Happiness*. Durham: Duke University Press.
- Anderson, Ben. (2010). "Modulating the Excess of Affect: Morale in a State of 'Total War.'" In Melissa Gregg and Gregory J. Seigworth (Eds.), *The Affect Theory Reader*. Durham: Duke University Press. 161–185.
- Bauman, Zygmunt. (2011, August 9). "The London Riots: On Consumerism Coming Home To Roost." *Social Europe*. Retrieved August 18, 2015, from <http://www.socialeurope.eu/2011/08/the-london-riots-on-consumerism-coming-home-to-roost/>
- Berlant, Lauren. (2011). *Cruel Optimism*. Durham and London: Duke University Press.
- Community Resilience UK. (2012). *Community Resilience*. Retrieved August 2, 2015, from <http://www.communityresilience.cc/>
- Duggan, Lisa. (2003). *The Twilight of Equality?: Neoliberalism, Cultural Politics, and the Attack on Democracy*. Boston: Beacon Press.
- Faull, Jennifer. (2013, December 27). "Coca-Cola launches #ReasonstoBelieve campaign with new ad." *The Drum*. Retrieved August 5, 2015, from <http://www.thedrum.com/news/2013/12/27/coca-cola-launches-reasonstobelieve-campaign-new-ad>
- Freeman, Elizabeth. (2005). "Time Binds, or Erotohistoriography." *Social Text*. 23.3–4, 57–68.
- "Government Response to the Riots, Communities and Victims Panel's final report." (2013). *Gov.uk*. Retrieved August 5, 2015, from https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/211617/Govt_Response_to_the_Riots_-_Final_Report.pdf
- The Guardian and LSE. (2012). *Reading the Riots: Investigating England's Summer of Disorder*. *LSE Research Online*. Retrieved July 20, 2015, from [http://eprints.lse.ac.uk/46297/1/Reading%20the%20riots\(published\).pdf](http://eprints.lse.ac.uk/46297/1/Reading%20the%20riots(published).pdf)

- Love, Heather. (2007). *Feeling Backward: Loss and the Politics of Queer History*. Cambridge and London: Harvard University Press.
- Luciano, Dana. (2011). "Nostalgia for an Age Yet to Come: Velvet Goldmine's Queer Archive." In E. L. McCallum and Mikko Tuhkanen (Eds.), *Queer Times, Queer Becomings*. New York: State University of New York Press. 121–157.
- Massumi, Brian. (2002). *Parables for the Virtual: Movement, Affect, Sensation*. Durham: Duke University Press.
- Milanovic, Branko. (2011, August 17). "The London Riots and the Triumph of Neo-Liberalism." *Harvard Business Review*. Retrieved 17 August, 2015, from <https://hbr.org/2011/08/the-london-riots-and-the-trium>
- Puar, Jasbir K. (2007). *Terrorist Assemblages: Homonationalism in Queer Times*. Durham and London: Duke University Press.
- Puar, Jasbir K. (2011). "Coda: The Cost of Getting Better: Suicide, Sensation, Switch-points." *GLQ*. 18:1, 149–157.
- "Rioters need tough love, says David Cameron." (2011, September 2). *BBC News*. Retrieved August 12, 2015, from <http://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-14760686>
- Rogers, Peter. (2013). "Rethinking Resilience: Articulating Community and the UK Riots." *Politics*. 33: 4, 322–333.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. (2003). *Touching Feeling: Affect, Pedagogy, Performativity*. Durham and London: Duke University Press.
- Seigworth, Gregory J., and Melissa Gregg (2010). "An Inventory of Shimmers." In Melissa Gregg and Gregory J. Seigworth (Eds.), *The Affect Theory Reader*. Durham: Duke University Press. 1–25.
- Stratton, Allegra. (2011, August 15). "David Cameron on riots: broken society is top of my political agenda." *The Guardian*. Retrieved August 5, 2015 from <http://www.theguardian.com/uk/2011/aug/15/david-cameron-riots-broken-society>
- Wall, William. (2011, August 10). "Tottenham: Neoliberal Riots and the Possibility of Politics." *Critical Legal Thinking*. Retrieved August 17, 2015, from <http://criticallegalthinking.com/2011/08/10/tottenham-neoliberal-riots-and-the-possibility-of-politics/>

Whyman, Tom. (2013, June 22). "Cupcake Fascism and the Death of Possibility." *Infinitely Full of Hope*. Retrieved 28 July, 2015,
from <http://infinitelyfullofhope.wordpress.com/2013/06/22/cupcakefascism/>

Whyman, Tom. (2014, April 8). "Beware of cupcake fascism." *The Guardian*. Retrieved July 28, 2015,
from <http://www.theguardian.com/commentisfree/2014/apr/08/beware-of-cupcake-fascism>

**Parables of a Cupcake: the Deployment of Affect, the National Body
and Homonationalism in the Aftermath of the London Riots**
Mayu IIDA

This paper examines how the notions of affect, the national body and homonationalism have been deployed and articulated in the aftermath of the London Riots that took place in August, 2011. With reference to Tom Whyman's article "Beware of cupcake fascism" published on *The Guardian* in 2014, which illustrates oppositional responses to the riots, I will investigate the way the cultural tropes of cake and cupcake could be associated with emerging debates within feminist and queer politics. As the incidents have brought out several structural deficiencies in terms of race, class and poverty, it is significant to pay careful attention to the ongoing construction of the bodies of others in contrast with the government's comprehensive recovery scheme entangled with the declaration of the national ideal as well as the re / production of privileged citizens. It must be stressed that the government insisted on mending "broken society" with a specific focus on conservative values of family and ideal Britishness regardless of rioters' varying backgrounds and causes of social oppression. Whyman's article does not only offer a critical insight into differential orientations towards what is deemed a national crisis, it also reveals the rhetorical affirmation of middle-class values against possibilities of social change by claiming emotional others as the objects of "clean-up," who disturb the existent boundaries of the national body. Reflecting upon Sara Ahmed's influential argument of the stickiness between bodies and emotions, I will first attempt to unfold the complicated process of incorporation into the body of the nation, which is followed by an in-depth analysis of legitimate and alternative historicity in relation to "good-life-fantasies" and Lauren Berlant's concept of "cruel optimism" that the nation promises as a normative condition of everyday lives, which is, however, suspended for the maintenance of the

future. The arbitrary appropriation of the imagined past for a better future then secures the national ideal, while it inevitably bears a historical burden such as the privilege of whiteness and the liberal-bourgeois subjecthood. In addition, the metaphors attached to the objects of consumption will further be discussed with regard to homonationalism defined by Jasbir K. Puar, in that the rioters' bodies marked as others are meticulously expelled from neoliberal political economy behind the logic of social progress. The riots bring to the fore the intersection of affective politics, queer alternative historiography and the rise of homonationalism against universalising and idealising narratives deployed by the nation in the face of a crisis, whose underlying imperative may sound surprisingly familiar.

Keywords:

affect, the national body, homonationalism, cruel optimism, queer historicity

